

北京の二つの会議

佐藤 宏

二〇〇六年一〇月末、北京で同時並行的に二つの国際会議が開かれた。一つは「諸文明の調和と万人の繁栄」を統一テーマに掲げる「北京フォーラム二〇〇六年」、もう一つは「人間開発フォーラム二〇〇六年」である。前者は五〇〇人近くが参加する巨大会議であったが、筆者が出席した「調和ある都市・農村関係に向けて」分科会を含めて一〇の分科会のうち少なくとも三つが、何らかの形で格差を取り上げるものであった。後者は、いうまでもなく開発と格差・貧困をテーマとするものである。

両方の会議に招かれた著名人にノーベル経済学賞受賞者のアマルティア・セン教授がいた。セン教授は所得や消費のみによつて格差や貧困を分析するアプローチを強く批判する。そして、ケイパビリティ (capability)、すなわち人間の生にとつて好ましいことから (生存維持の物的基盤から社会的尊厳まで) を自ら選択しうる幅がどれだけ広いかが重要であるという。セン流のケイパビリティ概念が開発と格差に関する理解を深めるうえで示唆に富むことは間違いない。しかし、それは本質的に重層的で多面的な概念であるため、何か一つの物差しで測定したとたんに、他の重要なことが抜け落ちてしまうという不安がつきまとう。とはいえ、開発の実証研究や政策現場で格差や貧困を問題にするとき、何らかの目に見える物差しを用いな

いことには話が進まない。

ケイパビリティを測る一つの方法は国連開発計画 (UNDP) の人間開発指数 (HDI) のように、所得・教育・健康など複数の物差しを組み合わせることだが、組み合わせに意味をもたせるためには、やはり個々の物差しを良く吟味しなければならぬだろう。セン教授自身が「人間開発フォーラム」における報告で、今後より深い考察が必要な物差しとして強く示唆したのは健康であった。

筆者が「北京フォーラム」に出席していて、別の可能性を感じたのは、オックスフォード大学のジョン・ナイト教授が報告した、主観的な豊かさの指標 (人々の生活にたいする満足度や幸福感) を用いた中国における都市・農村格差の分析である。主観的指標を用いた分析には、貧しさに慣れてしまった人々に「満足ですか」とたずねて何の意味があるのかという批判が当然出てこよう。しかし人々の個人的特徴や生活環境、人々が自分の状況を評価するときに誰と比べているのかなど様々な要因を注意深くコントロールしていくことで、差別や抑圧によつて生じた人々の嗜好の歪みをも明らかにしたうえで、人々に自身自身のケイパビリティを語らせることができるのかもしれない。

(文とつ) ひろし／一橋大学大学院経済学研究科教授